

《南 直哉》氏

「魂のゆくえ」

霊場恐山

私は今、青森県の恐山で院代（住職代理）をしております。ありがたいことに、最近は恐山もしばしばメディアに取り上げられ、その風景を御存じの方も多いでしょう。火山の噴火跡のような所に巨大な岩がゴロゴロしていて、ケルンみたいに小石があちこちに積み上がっています。さらに無数の風車が立ち並び、そこへ冷たそうな風が吹いてきて、カラカラと回っている…というような映像や写真を見たことがありませんか。あの風景と、土着の霊媒師として有名な「イタコ」さんが揃えば、恐山のイメージはそれでほとんど決まるでしょう。

そしてダメを押すのが、「霊場恐山」という名称です。これを目にすれば、まず十中八、九、人は幽霊の出る怖い所だと思ってしまいます。ただ、私自身は恐山に来て 14、5 年になりますが、一遍も見たことがありません。「私は見た」と証言する人にも会ったことがありません。

それでは、なぜここは 1200 年以上もの間、霊場であり続けてきたのか。何でここにこんなに大勢の人が来て、霊場として特別視されているのだらうと、私は院代就任以来ずっと考えてきました。それに思い当たったのが、7 年前の東日本大震災の時です。

あの地震の直後、あまりにも広汎で甚大な被害なので、「今年はここを訪れる人もほとんどいないだろう」と、恐山の住職はその年、5 月の開山をやめようと思ったそうです。

ところが、開けてみたらその日から、遺族が犠牲になった家族の供養に来たのです。以後も絶えず遺族の参拝がありました。ならばそこには、「死者」の存在が持つ決定的な意味があるはずで。

なぜ私はここにいるのか

東日本大震災の前と後で、私は、日本人の生きている感覚が変わったと思います。どう変わったかといいますと、「明日は我が身だ」ということです。3.11 以後、あの地震は東北だけのこと、原発事故は福島だけ、我々とは全く関係ないなどと思っているお目出たい人間が、今の日本に多くいるとは私には思えません。

あのときの根本的な衝撃は、おそらく、「あそこで多くの人が被災して亡くなっているのに、なぜこちらは無事なのか」という問いとして、自覚があるかどうかにかかわらず、我々の意識の深いところに刻印されたでしょう。

当時私は福井にいて、仙台の平野を襲う津波が走る車のみ込んでいくところを、テレビで茫然と見ていました。「あ、あの運転者は死ぬだろうな」と思いつつ、自分は畳の上に座って彼の死を見ている。なぜ死ぬのは彼で、見ているのはぼくなのか。

この問いは、ついには「なぜ私がここにいるのか」という問いに連続します。だから、東日本の地震や原発事故が深刻な影響を我々に与えるのです。本来、この災害は被災者以外の者には「他人事」のほうです。他人事なのになぜこんなに堪えるのか。それは、被災しようとしまいと、この問いに答えがないからです。換言すれば、今生きている誰もが、「自分がなぜ生まれてきたか分からない」からです。

今日、この会場で自分がなぜ生まれてきたか、知っている人は、いないはずで。母親のお腹の羊水の中に浮いているところに、どこから声が聞こえてきて、「あなたは何年、何月、何日に、どこどこで、こういう人を両親に、およそこういう人生を送ります。よろしいですか」といわれて、「はい」といって生まれてくる人がいれば、それが生きている理由や根拠になるでしょうが、そんな人はいません。生まれた後に他人から聞かされる話は、後付けのお伽噺にしかありません。

事実として、生まれてきた理由は分からない。ただ単に、意味も目的も価値もなく、母体から出てきただけです。死ぬという意味も分からない。最初と最後が分からないのに、なぜここにいるのか分かるわけがありません。だから、みんな不安なのです。

自分が生きる意味と価値

我々は、意味だの価値だのを分らないで、ただ生まれてくる。それで何とかなるのは、生まれてきた瞬間に「よくぞ生まれてきてくれました」と受けとめてくれる手があるからです。これを後に「親」といいます。そのような親がいるということは、すごく幸運なことです。私は、この幸運を赤ん坊は本能で知っていると思います。なぜかという、赤ん坊は1週間たつたないうちに突然「ニコッ」と笑います。

そんな顔面の筋肉が動くように生まれてくるのだったら、もっと手足が動くように生まれてくるべきだと思いますが、そもそも手足よりも大事だから、顔面の筋肉が動くのでしょう。すなわち、親を見て「ニコッ」と笑うのは、媚びているのです。「お父さん、お母さん、よろしくね。可愛がってちょうだいね」って。可愛がって抱いてもらわないと命に関わると知っているから、笑えるように生まれてくるのだと思います。

自分が生きる意味や価値は、幾ら本を読んだり考えたりしても分かりません。人は、自分の「命」の意味や価値は他者を通じてしか分からない。絶対に分かりません。当たり前です。誰も自分の体を自分で作っていないし、自分の名前を自分で付けられません。全部他人からです。

ならば、その他人に「あなたがそこにいるだけでうれしい」と言ってもらえない限り、自分の「命」の意味や価値は分かるはずがありません。そして、それを最初に言うべき人が「親」なのです。

人は産んだだけでは「親」になりません。生まれてきた存在を、彼がただそこにいるということだけの理由で、全面的に肯定できる者が「親」であり、それこそが「親」の責任であり資格です。そして、その肯定をする人がいるということが、生きる意味と価値をつくり出す上で致命的に重要なことなのです。

私が以前相談を受けた70歳を過ぎた方は、ずっと人間関係がうまくいかないという悩みを抱えていました。面談してよくよく話を聞いてみると、彼女は幼い頃に母親に心ない言葉を浴びせられていたのです。「あんたさえないなれば」と。

場合によっては自分の命より大事な母親にそう言われたら、二度と人を信じなくなるでしょう。彼女は自分の存在の根底を損傷してしまったのです。結果的にその後の人間関係がうまくいなくなるのは、実に当たり前です。

死者と魂のゆくえ

私は、恐山には「幽霊」はいないけれども「魂」はいると思います。「魂」はまさに生きる意味と価値のことであり、これは、人との関係で育まれるしかないものです。

私はあるとき、老僧から次のようにいわれました。「人は死ぬとその人が愛したもののところへ行く。人が人を愛したんだったら、死んだとき、愛した人のところへ行き、仕事を愛したんだったら、その仕事の中に入って行く。だから、思い出したくなくても死んだ人を思い出さう。それは心の中にいるからだ」と。そうなるのは、死者が遺された者の「魂」を育ててくれたからなのです。

生きていても死んだとしても、親は親、子は子です。大切な人は大切な人です。大切な人とは、我々の魂を育ててくれた人です。死者というのは、生者同様、あるいはそれ以上に、我々の存在に深く食い込んでいる人です。これは気持ちでどうなるものでもなく、私が私であることの一部なのです。死者は決していなくなりません。それは心の中にあるかないかという話とは違います。それは厳然と存在しています。触れもできなければ話も聞けないけれど、確かにいるのです。

同時に、我々は死者を通してしか自分の「死」を見ることができません。絶対に分からない「死」を何とか想像しようとしたら、死者を通してしか見ることはできません。恐山は死者に会おうとして人が訪れるわけですが、実はその死者を通じて自分の「死」を見ようとしているのです。

生と死の時間は並行に流れます。命の終わりは生の時間の終わりではなく、生と死の終わりなのです。人は死なない限り自分の「命」を自覚することはありません。人が自分の生きている意味や重さを感じるのは「死ぬ」からです。「生」に意味が宿るのは「死ぬ」からです。おそらく恐山はそれを体験的に教えてくれる場所だと思います。